



今、生き生きと

旭川大学高校吹奏学部顧問、音楽教員

川島 明人 (かわしま あきひと) さん

第三地区クリスマスコンサートは、今やシーズン・グリーディングの恒例コンサート。全日本吹奏楽コンクール(高校の部)で金賞受賞するほどのクオリティー高いサウンドが町内で知られるようになり、今年1月には町中心市街地区の文化芸術交流センターで新春コンサートも開きました。そんな旭川大学高校吹奏楽部と町内の中学校、高校吹奏楽部との合同コンサート実現への話が出始めているそう。今や吹奏楽コンクール常連校に成長した旭川大学高校吹奏楽部の音作りの陰には、20年以上にわたる地道な指導が生きていました。

「東川高校の吹奏楽部もうまくなっているし、中学校とも一緒にやってみたい」と町内の学校吹奏楽部との合同コンサート実現を楽しみにしています。



吹奏楽部練習風景

「楽器やりたいって集まっている子たちだから、そこは一生懸命けれどもうまくいかなかった。遠慮しながらやってたんですね」。化粧する子、スカートを短くする子もいたそうです。

顧問を引き受けて2年後の冬休み、勉強会(学習会)と称して、生徒とのミーティングをやるようになったそうです。

「生徒指導のように厳しく人間的な話をして、自分が読書した本をコピーしてみんなに配って読ませた。授業受けない、担任の言うことを聞かない子たちに、学ぶこと、メンタル、人間関係の学問を何時間でも続けたんです」。そして現在の高い質への成長へ。

川島明人さん

旭川大学高校音楽教員。旭川市出身、1996(平成8)年から町内在住。49歳。北海道教育大学旭川校卒(音楽研究室)。小、中学校教員を経て1992(平成4)年から旭川大学高校教員。吹奏楽部の指導3年後の2006(同18)年、初出場で全日本吹奏楽コンクール東日本大会初優勝すると、2年連続金賞(C編成25人)。その後毎年同コンクール東日本大会、全道大会で金賞を重ね、常連受賞校に(東日本大会は3年連続出場できないため、2年連続出場の際は全道大会までの出場)。昨年は北海道吹奏楽コンクール高校の部(B編成)金賞を経て北海道代表として出場した第17回東日本中学校吹奏楽大会(東関東吹奏楽連盟主管、昨年10月宇都宮市文化会館)で、「秘儀Ⅳ～行進」(西村朗作曲)で銅賞。同12月、第三地区コミュニティーセンターで第4回クリスマスコンサート。続く今年1月17日、文化芸術交流センターで初の新春コンサートを開催。

「全国レベルの大会では、金賞も銅賞もそれほど実力差はない。けれど金賞の演奏は、聞いていると分かるんです。感情的にもリズムも音程も非の打ちどころがない。それでいてしっかりと訴えている。うちはちよつとテンポがあいまいだったり、ばらつきを感じるどころがある。今一つ感動しないんです」と、わずかなずれ、揺れが金、銅の賞を分けるのだと言います。

2007(平成19)年から20



第三地区クリスマスコンサート(昨年12月23日)

14(同26)年までは、完全音階モード、機械的リズムを多用した米国人作曲家、ヴァーツラフ・ネリベルの曲を毎年演奏していたそうです。

「気が付いたら現代音楽ばかりやっていた。アタックが強く、音を押し出すストレートな曲で、強い音のサウンド。でも2010年に八戸市公会堂で演奏した時、うちの演奏が大きすぎる、力任せに聞こえてしまうことに気づいたんです」。

「今はインパクトに頼らない音が出ている。合わせる力と一人で演奏する力とは違うと思う。学校で教えているんだから、みんなには合奏力をつけさせてあげたい」。

◇ 指導当初、学校はいわゆるマンモス校といわれ、1学年に約600人も生徒が在籍していたそうです。しかし当時部員はわずか8人でした。ちなみに今年3月時点の部員は27人。